

課題名：ナベヅルと共生する循環型農業の米産地づくり

周南農林事務所農業部
河谷基次、山榮午朗

1 背景・目的

周南市八代地区では、地域住民をあげて特別天然記念物「ナベヅル」の保護活動に取り組んでおり、平成 18 年、八代地区自然再生協議会を立ち上げ、ナベヅルの生息環境を保全できる農法の研究をすることになった。

周南農林事務所は、研究活動の一環として地域の農業法人「(農)ファームつるの里」が取り組む水稻栽培技術の確立を支援することにした。

注) 八代地区自然再生協議会は、土地改良区を中心とした農業団体やナベヅル保護団体等で構成し、ナベヅルの越冬環境整備と農村振興を目的に、調査研究や啓発活動を行う。

2 活動内容・成果

(1) 先進事例の研究

コウノトリの繁殖及び農法の特徴を生かした米の販売で成果を上げている兵庫県豊岡市の「コウノトリを育む農法（冬期湛水栽培）」の調査を行い、当地区でも導入できる可能性があると見込まれることから、実証ほを設置することとなった。

(2) 実証ほの設置

平成 19 年から化学肥料・化学農薬を使用しない「冬期湛水栽培」の実証ほを設置し、試行錯誤しながら栽培技術を確立しつつある。

ア 1 年目 (H19 年)

苗の肥料不足、茎数不足、穂肥判定不能、熟期のバラツキ、一部コナギの多発、低収量 324kg/10アールで、普及上の課題が多く残った。

イ 2 年目 (H20 年)

前年実績を踏まえ、育苗中の追肥、栽植密度の確保、ほ場の均平等に取り組んだ。熟期のバラツキやコナギの発生、一部倒伏が見られたが、収量は 453kg/10アールを確保できた。

一方、越冬中のナベヅルが水を張った水田にあまり入らないことが観察されるという問題点が生じた。

ウ 3 年目 (H21 年)

冬期の湛水を実施できる農家が少ないと見込まれること、また、ナベヅルは水深 10cm 以上の湛水を好まないと推察されることから、ナベヅルの北帰行後の 4 月から湛水を開始する「早期湛水栽培」の実証ほを設置した。

機械除草機を導入したが、作業の不慣れによる苗の損傷あり、また、コナギの発生も多く、収量は 376kg/10アールにとどまった。

(3) 「つるの里米」PRに係る支援

(農)ファームつるの里では、冬期湛水栽培の米を「エコやまぐち農産物認証制度」の認証（化学肥料農薬無使用）を受け、付加価値の高い「つるの里米」としてJA直売施設や郵パックなどで地元及び県外消費者に販売し、好評を得ている。

3 今後の課題

今後、栽培面積(H21年 2ha)を拡大し、地域の生産者が導入できる技術として普及するためには、早期湛水、機械除草の技術確立（目標収量：420kg/10アール）が必要である。

また、付加価値の高い米として安定して販売するためのJA等との連携強化が必要である。